
【東方】 ～ 幻想の空、伝説の戦士～ 【エスコン】

ちくわの神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【東方】　　く幻想の空、伝説の戦士　　【エスコン】

【Nコード】

N0717Q

【作者名】

ちくわの神

【あらすじ】

時期的にいえばもう春になってもおかしくないのに雪が降りしきる幻想郷。そんなある日、閃光と爆音とともに鉄の鳥が空に現れた…
遅筆、キャラ崩壊、ggdその他諸々見る人は注意して行ってね
!!

とりあえず

どうも、はじめましてちくわの神と言います。
もしかしたら知ってる方はどうもです。

今回は衝動的に東方とエスコンを混ぜ合わせた作品を描いてみたくなりしました。

某動画サイトでは有名な東方A C E C O M B A Tと同一視される方もいるかもしれませんが

一応全く別物のはずの予定ですw

しかし、自分はある動画のファンなので影響はあるかもしれないことは御了承を。

長々と書いていますが、この物語は俗に言う幻想入りものです。

東方でいえば、紅魔郷からスタート、したかったのですが

館の中で戦闘機って無理じゃね？ってことで妖々夢からです。

エスコンのキャラは…5とZEROの予定です。

つまり、5の面々は歴史上の方々と対面するということです。

…あれ？これもつと文才のある人がエスコンのみでやってもいいんじゃない？って思ったその君！！

自分もそう思いますwが、暇な人は見ていってください。

P S ・それぞれの経験はエスコンは4、5、ZEROをクリア

東方は緋想天はクリア、永夜抄と風神録を途中で断念

非想天則はP Cの性能的にリリースするので断念という感じ
です

プロローグ（前書き）

誤字・脱字等があったら教えてください。

プロローグ

「どうも、ちょっと取材させていただきませんか？」

「ああ、かまわないさ。それで？何が聞きたい？」

「あなた方がこの幻想郷にやってきてからの話を聞きたいんです。話してもらってもいいですか？」

「そうだな、何処から話そうか。やはりこういうのは初めから話した方がいいよな。」

「お？何やってるんだ？俺も混ぜてくれよ。」

「…チョッパ―、邪魔になるからこっちに来なさい。」

「ちえっ、ピクシーの旦那。終わったら教えてくれよ。」

「オーケイ、分かったよ…で、初めからだったよな？」

「はい、あなた方はどんなふうここにやってきたんですか？」

「向こうの奴らのことはまた向こうに聞いた方がいいが、俺ら…というか俺とあいつは丁度一騎打ちしてたのさ。俺はその時あいつに負けて空から落ちて行っただのさ。その時だよ、空が光ったのは。」

俺はてつきりミサイルが炸裂したのかと思った。だけどそうじゃなかった。光がやむと俺もあいつも違う空を飛んでいたのさ。そして気付いたんだ。その空はまるであの時と同じだった…

あいつと俺が初めて飛んだ時と同じ、あれは雪の降る寒い日だった。

┐

プロローグ（後書き）

今回はプロローグということでセリフのみです。次回以降は普通に戻ります。

あ、セリフの前とかに名前って入れた方がいいですか？
参考として入れた方がいいって人は教えてください。

第一戦（前書き）

誤字・脱字等があつたら教えてください。

<募集>

出してほしい機体を募集しております。

「。。。にこの機体に乗ってほしい」でも「誰でもいいからこの機体」でもかまいません。

第一戦

ピクシー side

「時間だ」

俺のその言葉とともにV2が発射される。

「くそっ！V2の発射を確認！」

「惜しかったなあ、相棒。歪んだパズルは一度リセットするべきだ。このV2で全てを『ゼロ』に戻し、次の世代に未来を託そう。」

本当に惜しかったな。相手がお前でなければもっと単純にリセットは行われたはずだ。さすが『円卓の鬼神』だな。

「…今そこで彼を撃てるのは君だけだ。円卓の『鬼神』、幸運を祈る！」

確かに俺を落とせるのは相棒であるお前以外にはいないだろうな。全く、これだけハイスペックの機体相手にここまでやってくれるんだらかな…だが、相手が誰であろうと俺はなくさなくてはならない、あの無意味な国境を。ただ争いを生むだけの物を。

「国境が俺たちに何をしてくれた？」

俺たちは真正面からぶつかり合う。

「無敵のエースってのは戦場に長く居すぎたやつの過信だ。お前のことだよ、相棒。」

やるか、やられるか。

「撃て！臆病者！」

……そして、俺たちの勝負は決着が着いた。

最後の競り合いで俺がサイファーに撃たれたことによって。

「くそ、ここまできて俺の負けか…俺の考えは間違っていたのか？」

『片羽の妖精』がこのザマか、鬼神はやっぱり恐ろしいもんだ。

「いや、お前の考えは間違っていない、むしろ合ってるのかもしれない。だが、お前は手段を間違えたんだ。」

無線が生きてやがったか。

「両方とも必死に戦って俺が負けたってことはそういうことなのかも知れんな…相棒、これからの世界を頼んだぜ。」

さて、脱出装置はまだ生きてるかな？まあ死んでもいいさ。必死にやった結果だ、後悔はしていない。

「こちらAWACS、V2の破壊をかくにん…待て！本部より緊急入電！アヴァロンダム上空に異常な電磁場の検出を確認、至急離脱せよ！」

何だと？V2の炸裂の影響か？

「こちらガルム1、原因は何だ？」

「分からん、とにかく離脱せよ！」

「おい、あの光は一体何だ……」

誰が言ったのかは分からなかったが、その声を最後に俺たちは光に
呑みこまれた……

第一戦（後書き）

ZEROの内容を復習するために再度プレイ…

やっぱりPJの死亡フラグは露骨すぎると思いますw

今回の戦闘シーンはミッション「ZERO」からなので詳細は省きましたが…

次回以降大丈夫かな（汗）

第二戦（前書き）

誤字・脱字等があったら教えてください。

<募集>

出してほしい機体を募集しております。

「。。。にこの機体に乗ってほしい」でも「誰でもいいからこの機体」でもかまいません。

お気軽にメッセージか感想で教えてください。

第二戦

霊夢 side

「これは異変よ。」

私、博麗霊夢は博霊神社のコタツでお茶を飲みながらそう言った。

「はあ？急に何を言い出すんだぜ？」

一緒にお茶を飲んでいた霧雨魔理沙が可哀想なものを見るような目で私を見てきた。失礼ね、私はいたって正常よ。

「もう季節で言ったら春になっていてもおかしくない時期じゃない？それなのに幻想郷はいまだに雪が降っている…これは確実に異変だと思っわ。」

「まあ確かにそうだが…何故断言できる？」

「巫女の勘よ。」

巫女の勘は結構当たるもんなのよ。

「勘、ねえ…でだ、もし異変だとしたら誰がやっているんだ？」

そう、問題はそこなのよね。これが異変だっていうのは分かったんだけど、犯人はまだ分からないのよねえ…

「とりあえず温かい方に行けば何か分かると思わない？」

もし、何らかの方法で犯人が幻想郷を冬にしているのなら本来の春はその犯人のもとにあるはずだ。だから自然とそのあたりは温かいと思う。そうでなくても、何か手掛かりはあるはずだ。

「そうだな、じゃあまずは温かい方に良ってみるかあ」

そう言つて博霊神社を二人で出ようとしたその時、

「あら？あなた達もこの異変の解決に？」

後ろから聞いたことのある声が聞こえた。

「ああ、『も』ということは咲夜もか？」

「ええ、お嬢様に調査して来いと言われたからね。」

彼女、十六夜昨夜は紅魔館というところでメイドをしているわ。彼女…というか、その主のレミリア・スカーレットが以前に起こした異変（俗に言う紅魔郷異変）を私と魔理沙が解決してからは割と仲

良くなっているわね。で、今回はそのレミリアに頼まれて調査に来たってことか。

「ならあんたも一緒に来る？一応私たちは温かい方に行けば何か分かると思つて向かおうとしてるんだけど。」

「そうね、あなた達がいれば心強いし一緒に行かせてもらうわ。」

そうして私と魔理沙、そして咲夜の三人は異変解決に向けて乗り出すのであった。

が…

その時、突如の閃光と爆音に私たちは防御態勢も取れずただ視界を奪われ、耳がキーンとなった。そして視界が回復すると…そこには鉄の鳥が飛んでいた、それも何羽も。しばらく見ているとその鳥たちはならんでどこかへ飛んで行った。

「あれは何だったのかしら？あんな大きくて変わった鳥見たことないわね…今回の異変に関係あるのかしら？」

そして私たちは温かい方ではなく、まずあの鳥たちを追うことになった。

これこそが、私と彼・彼女たちとの最初の出会いであった。

第二戦（後書き）

次回は遂に、幻想郷の住人とエスコンのキャラ達が遭遇します。
ちなみに、5の面々の出番はもうちつと先です。

では、自分は遅筆なんで次はいつになるか分かりませんが、また次回。

第三戦（前書き）

誤字・脱字等があつたら教えてください。

主人公は特に性格が分らないので、作者の独断と偏見で作りました。

なお、サイファーは「ナイト」でクリアしたと思ってください。

<募集>

出してほしい機体を募集しております。

「○○にこの機体に乗ってほしい」でも「誰でもいいからこの機体」でもかまいません。

お気軽にメッセージか感想で教えてください。

第三戦

サイファー side

くっ…今の閃光は一体何だったんだ…天候が悪化したのか下の状況が確認できない。

「こちらイーグルアイ、ガルム1聞こえるか？」

「こちらガルム1、感度良好。一体何が起こったんだ？」

レーダーを確認する。どうやら何処も故障している様子はないようだ。

「分からない。無線機器はこうして会話できているということは生きているはずなのだが…本部と連絡が一切取れないのだよ。」

どういうことだ？連絡が取れないということは電磁パルスのようなものでも使ったのか？先ほどの閃光はその兵器の？…いや、それだったら今こうして会話していることもできないし、まずこの機体のいたるところが故障してしまっているだろう。

「私の方はこのまま連絡を取り続けてみる。ガルム1は高度を下げて状況を確認してきてくれ。円卓の鬼神が悪天候とはいえ地面とキスをするなよ？」

「ガルム1、了解した。せいぜい気を付けて飛ぶよ。」

さて、ダムの状況はどうなっているかな？

エース探索中……

おいおい、これはどういうことだよ…

「…こちらガルム1、なあイーグルアイ。俺たちはダムの上空を飛んでいたはずだよな？」

「ガルム1、一体何を言っている？当たり前じゃないk………もしや壊滅しているのか？そうなると先ほどの閃光はやはり何かの兵器だったのか…」

はあ、壊滅していたのならまだ説明がついたからましだったのにな…

「いや、村が見えるんだよ…」

「は？」

「だから、村が見えるんだよ。」

「何を言っているんだガルム1。この辺りは険しい渓谷で村なんてないぞ。」

イーグルアイがあきれた声で言うてくるが、俺だって信じられないぞ。

「それが本当にあるんだ。それもベルカやウステイオどころかオースシア、ユークでも見かけないような建物だ。」

それにだ…

「俺たちは溪谷の上を飛んでいたはずだが、今現在は平野の上を飛んでいる。先に山脈は見えるがアヴァロンとは別のようだ。」

「…どういうことだガルム1。俺たちは異国の地どころか異界の地へとても飛んだというのか？」

イーグルアイの言葉に俺は一つの予測を立てた。

「なるほど、そういうことが…つまりさっきの閃光は時空転移を引き起こす何らかの兵器だったというわけか。そう考えると俺たちの今の状況も説明できる。しかし一体何処の誰が？やはり国境なき世界の奴らの仕業か？いやしかし…」

「ガルム1、何ができるほどだ。わけの分からないことを言うんじゃない。円卓の鬼神が現実逃避など目も当てられんぞ。」

うるさい、俺だって戦闘でのことならいくらでも冷静に対処できるさ。でも、こんなSF映画にしかないような体験をしている今は、逃避でもしないとおかしくなってしまうそうだ。

「…ザザッ…こちら…」か応答を…」

すると誰かから無線がはいった。今は情報がほしいからな。連絡を取ってみるか。

「こちらガルス1、そちらの所属を答えろ。」

「ガガッ!!… rム1?!… dす。くそ、むs…」

無線の調子が悪いのか?… いや敵パイロットか?— 応戦闘準備はしておくか。

俺は操縦桿握りしめながらあり得ない声を聞いた。

「このっ！！あ、殴ったら直った……ガルム！、こちらPJです……！
また会えて良かったです……！」

……え？

第三戦（後書き）

後半、ガルム1のキャラ崩壊が目立ちますね。

反省はしているが後悔はしていないっ！！

今後も崩壊とかは多々あると思いますので苦手な方は「戻る」をお勧めします。

ってかまだ両作品のキャラの会話がないうっわ

第四戦（前書き）

誤字・脱字等があつたら教えてください。

<募集>

出してほしい機体を募集しております。

「。。。にこの機体に乗ってほしい」でも「誰でもいいからこの機体」でもかまいません。

お気軽にメッセージか感想で教えてください。

第四戦

サイファースide

「P、P」だと……何を言っている。奴は俺の目の前でピクシーに撃ち落とされたはずだが……」

そう、ご丁寧にフラグを三本も立てる↓即回収という離れ業を披露したからな。

……ん？ふらぐ？俺は一体何を言っている（サイファースが電波を受信しました）

「こちらイーグルアイ、識別を見る限りどうやら本物のようだ。私も信じられんが……」

「確かに、こうやって飛んでいる自分も信じられないっすからね。」

「P」、とりあえずお前はアヴァロン上空でピクシーに撃ち落とされたP」だよな？」

こうやって確認でもしないと現在の状況からして

『俺は並行世界からやってきたんです。』

とか

『へ？さっきまで円卓に俺たちいましたよね？』

とか言いだしかねないから恐いのだが…

「…なんだか変な気分ですが、そうです。ピクシーに落とされたP
Jっす。」

良かった…少なくとも、俺の知ってるPJだ…

「また変な質問になってしまいが…どうして生きている？」

そう、生きていたのは確かに喜ばしいことだが、あの状況からの
生還…というか機体まで直ってるってどういうことだ？

「やっぱりそれ聞きますよね…一応説明しますが、質問してもほ

とんど答えられないと思いますよ？自分もよく分かってないっすから。では初めから言つとですね？…

- - - - -

P J s i d e

…花束も買つてあつたりして。」

あいつのことだからきちんと受け取ってくれるだろうな…

ん？あの光は…やばいっ！！間に合わない…

ドンッ！！！！！！

くそっ…最後の最後で…いろんな機器が死んで行く…こりゃ脱出装置もはたらかないなあ…あいつ、このこと知ったらどうするだろう…泣くかな？怒るかな？後を追う真似だけはしてほしくないなあ…
…もうすぐ地面か、俺の人生は誰かの役に立てたのだろうか？誰かが流す血をなくすことができたのだろうか…

ひゅんっ！！ガサガサっ！！ドサッ！！……ドカンッ！！

いたたたたた…キャノピーが吹き飛んでたせいで、まともに固定されてなかった座席ごと吹っ飛んだな…まあそのあと木に引っ掛かったし、機体の爆発に巻き込まれなかったから結果的には良かったか…でもなあ…

「ゲフッ…ゴホッゴホッ…」

撃たれた時にも既にキャノピーの破片やらで致命傷だったが、さっき吹き飛ぶ際に思いっきり左腕をもちがれて、どこかの金属部分が腹を貫いているからな…結局はここで死ぬ運命かあ…それでも、俺が参加したこの戦いの結末を見るぐらいまでは持つてくれよう…！！

………

ふう…どうやらサイファーが勝つたらしいな…さすがは円卓の鬼神というところですね…おかげで俺の死は無駄に終わらずにすんだから良かったです…これで安心して逝けるというものですねぇ…

ああ、空が光に包まれる…これでこの世ともお別れk…

.....

「...なs...おきn...kなさい...」

ん？誰かが俺を呼んでいる？

「...いい加減起きなさいっ！！」

「は、はいつ！！」

俺は思わず飛び起きる...あれ？俺、死んだよね？こっとう？

「全く…早く準備して、戻るのです。」

「へ？戻るってどういうこと？俺って死んだんじゃないの？っていうか、誰？そしてどこどこ？」

事態が急展開すぎて、状況が全くのみこめない俺。

「はあ…いいですか？まず、ここは簡単に説明すると死者を裁く裁判所のようなところです。私はこの長である四季映姫・ヤマザナドゥです。そして、あなたは死んでいない…正確には死にかけていたところを助けられました。だからあなたはここにいてるべきではない、早く戻りなさい。」

「いや、それは確かにありがたいですけど…どうやって戻れば？それに誰が助けてくれたんですか？」

というか、説明されても良く分からなかったんですが…

「はあ…質問の多い人ですね、まあ仕方のないことなのでしょうが…とにかく、強く戻ろうと念じればそのエネルギーをもとにしてあなたが助けてくれた人が戻してくれます。」

「あれ？誰が助けてくれたかはスルー？それに凄いご都合設定…」

「それは今後分かることです、その時までには本人も言ってほしくな
いようですので…後、メタ発言は自重しなさい。」

うるさいなあ、実際そうじゃないか…

「まあ確かにご都合設定かもしれませんが、助かるのならいいじや
ないですか。…では、またいつかあなたに会うのを楽しみにしてま
すよ。」

仮にあんたが本当に死者をさばく人なら二度と会いたないっす…

- - - - -

サイファー side

…という具合に、四季映姫とかいう人の言うとおりにして、ふと眼をあけると整備された機体に乗って飛んでいたという訳です。」

なるほどな…

「ふむ、良く理解できたぞ…」

「さすがサイファー、信じてくれるんだ」「きっと、墜落のショックで脳が混乱しているのだろう。落ちつけばきっと治せるから、な？」
…うん、若干の予想はしてましたよ。」

「だから言ってるだろガルム！、現実逃避をするんじゃないと…」

もうやだ、この現実…ピクシー倒してから何一つまともなことが起きない…

第四戦（後書き）

どうも、眠気に負けながらやったので、誤字脱字を見つけたら教えてください（汗）

作者「先生…擬音を、上手く使いたいです…」

先生「え？擬音だけかい？」

作者「ですよねーw」

先生…とにかく色々なものがほしいです…orz

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0717q/>

【東方】 ～ 幻想の空、伝説の戦士～ 【エスコン】

2011年4月7日13時33分発行